

令和7年度学校評価 教職員アンケート集計結果

[内部評価 対象:教職員]

[27名]

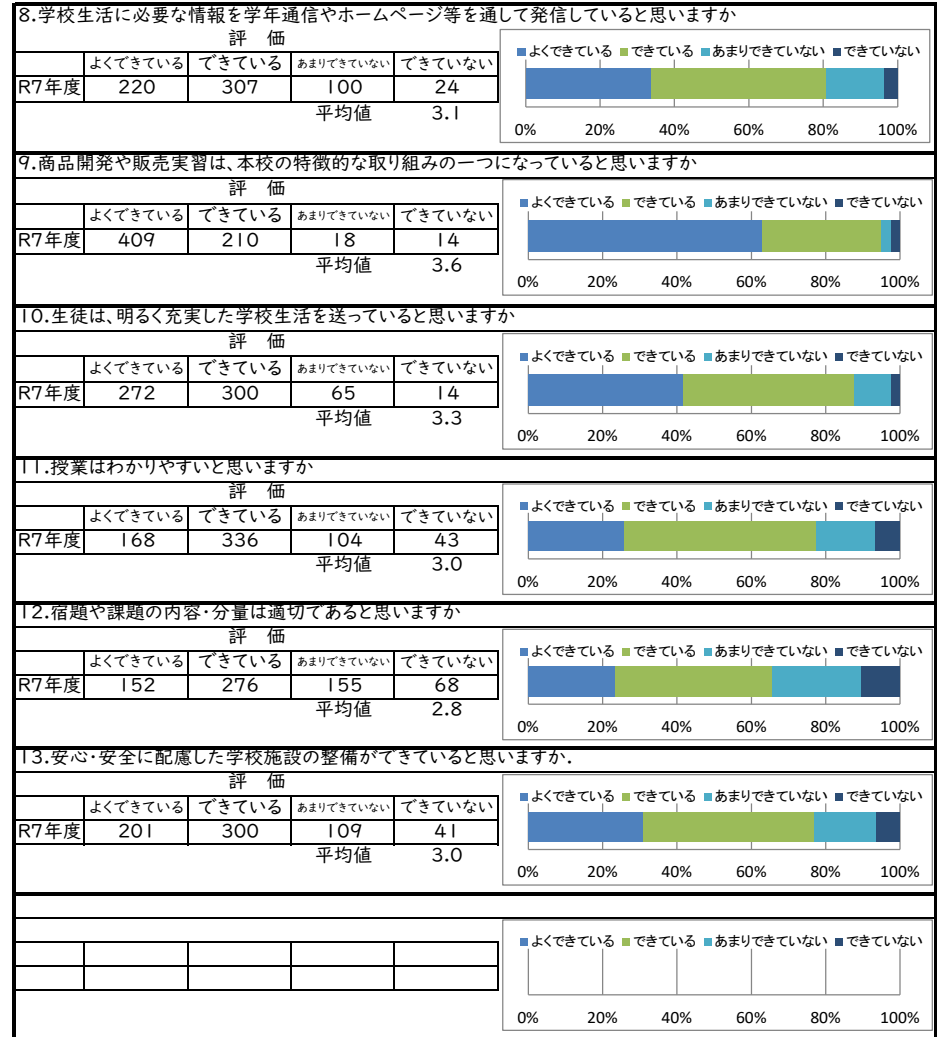
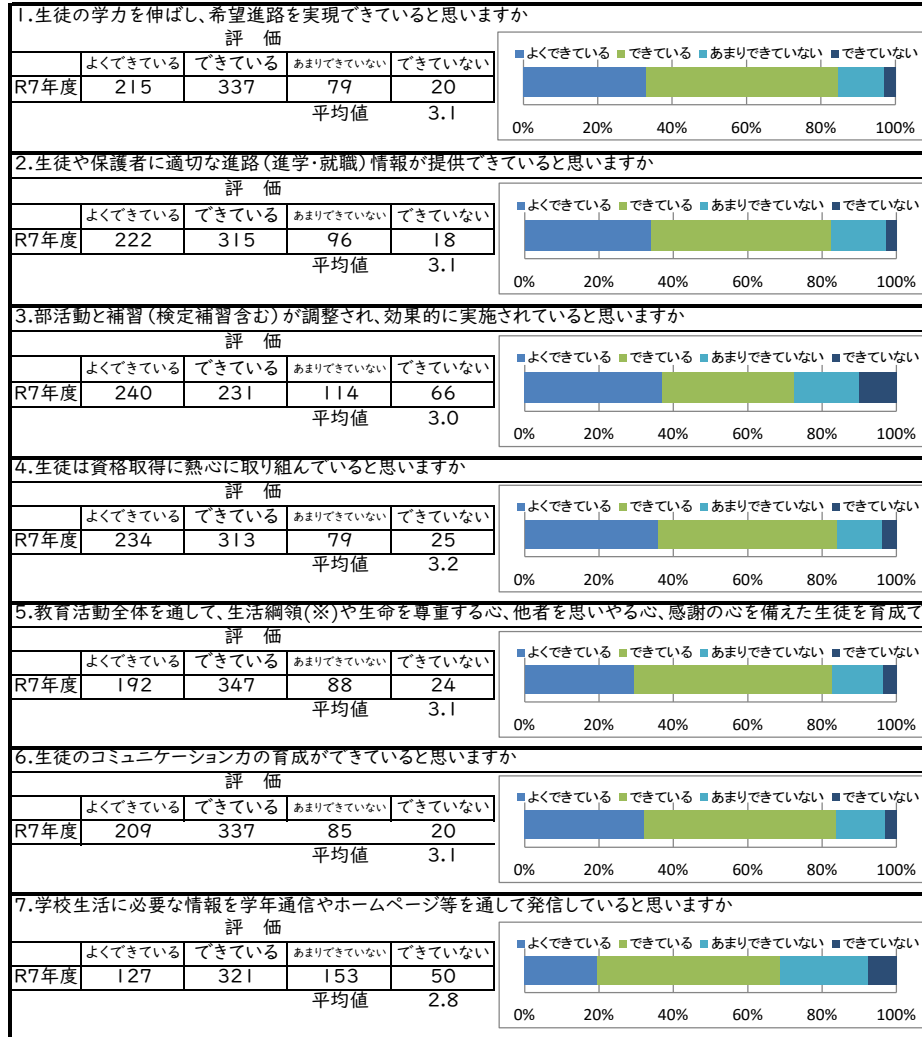
No	質問内容	平均値
1	生徒の学力を伸ばし、希望進路を実現できていると思いますか。	3.2
2	生徒や保護者に適切な進路(進学・就職)情報が提供できていると思いますか。	3.1
3	部活動と補習(検定補習含む)が調整され、効果的に実施されていると思いますか。	2.8
4	生徒は資格取得に熱心に取り組んでいると思いますか。	3.0
5	教育活動全体を通して、生活綱領(※)や生命を尊重する心、他者を思いやる心、感謝の心を備えた生徒を育成できていると思いますか。	3.0
6	コミュニケーション力の育成ができていますか。	3.1
7	マナーやルールをよく守っていると思いますか。	2.7
8	学校生活に必要な情報を学年通信やホームページ等を通して発信していると思いますか。	3.4
9	商品開発や販売実習は、本校の特徴的な取り組みの一つになっていると思いますか。	3.5
10	生徒は、明るく充実した学校生活を送っていると思いますか。	3.1
11	保護者や卒業生、地域、地元企業等と連携を図りながら、生徒が社会を感じることができている機会が十分設定されていると思いますか。	3.3
12	保護者との緊急連絡体制が確立されていると思いますか。	3.1
13	生徒のキャリア形成を支援するためのキャリア教育推進体制が構築されていると思いますか。	3.3
14	教員の教科指導力を向上させる体制が構築できていると思いますか。	2.9
15	安心・安全に配慮した学校施設の整備ができていますか。	2.6
16	生徒の学力を伸ばし、進路実現に向けた指導ができていますか。	3.1
17	進路情報を十分に理解し、生徒の進路指導に当たることができていますか。	3.1
18	授業見学、公開授業の実施、生徒からの授業評価(アンケート等)などを通して、自身の授業力向上に努めていますか。	2.9
19	「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善を行っていますか。	3.1
20	生徒の考える力を引き出すことを意識した授業を行っていますか。	3.3
21	コミュニケーション能力の向上を図ることを意識した授業を行っていますか。	3.0
22	課題提出ができていない生徒などに対する指導を十分に行っていますか。	3.1
23	部活動に熱心に関わっていますか。	2.8
24	生徒指導力向上のための取組を行うことができますか。	2.9
25	生活綱領にある目指すべき生徒像を意識した教育を行うことができますか。	3.0
26	生徒との挨拶を積極的に交わっていますか。	3.5
27	個人情報の管理・漏洩には十分に気をつけていますか。	3.6
28	ワークライフバランスを意識した生活ができていますか。	2.8

平均値は「よくできている」を4点、「できている」を3点
「あまりできていない」を2点、「できていない」を1点とした平均の値となっています。



※ 生活綱領 ・「自分で考え自分で行う人となろう」 ・「創意工夫に生きる人となろう」 ・「共に喜び生きる人となろう」

令和7年度 学校評価 生徒アンケート集計結果（生徒651名回答）



令和7年度 学校評価アンケート集計結果（保護者243名回答）



平均値は「よくできている」を4点、「できている」を3点、「あまりできていない」を2点、「できていない」を1点とした平均の値となっています。
 ※生活綱領「自分で考え自分で行う人となろう」「創意工夫に生きる人となろう」「共に喜び生きる人となろう」

令和7年度 学校評価報告

〔内部評価〕 対象：各専門部・学年

A:よくできた B:できた C:あまりできなかった D:できなかった

	重点目標	成果	評価	課題	改善策等
総務	・各部・各学年・各科・PTA・琴陵会（同窓会）との連携を密にし、学校の円滑な運営に努める	・年度計画に基づき、主要行事を概ね円滑に実施できた。 ・行事の目的を明確化し、生徒が主体的に参加する場面を設けたことで、集団の中での役割理解が進んだ。 ・気候等の状況に応じて動画配信システムを活用し、各HRへの一斉配信をスムーズに行うことができた。	A	・行事運営に向けた日程調整や保護者向け案内の作成に、さらなる精度と丁寧さが求められる。 ・動画配信システムの活用方法について、より効果的な運用の工夫が必要である。	・次年度以降の行事計画を見直し、3年間の系統性を踏まえた全校的な計画づくりを進める。 ・動画配信の活用場面を整理し、運用方法の標準化を図る。
	・広報活動の工夫と充実を図り、本校の特色（魅力）や情報を学校内外へ発信する。	・学校紹介動画・部活動紹介動画の作成、ホームページ更新等により、外部への情報発信量が増加した。 ・中学校訪問を継続した結果、オープンハイスクール参加者が増加し、7月・11月の2回で中学生 710名、保護者 530名が参加した。（前年比 320人増）	A	・オープンハイスクールの申込時期に合わせ、パンフレット等の広報資料を早期に準備する必要がある。 ・ホームページにおいて、授業・部活動等の取り組みを継続的に紹介し、学校理解をさらに深める工夫が求められる。	・各部署・学年と連携し、学校全体で計画的な情報発信体制を構築する。 ・体験授業の内容を改善し、本校の特色がより伝わるプログラムを検討する。
	・新1年生に対する人権教育アンケートを実施し傾向性や課題を把握する。 ・人権にかかわる問題の解決に向けて自主的に行動できるような人権意識を高める。 ・職員研修会を通じ、職員の人権意識の高揚と指導力の向上を図る。	・人権推進委員の先生方の助言を受けながらアンケート項目を設定し新1年生に対する人権教育アンケートを実施し、傾向性や課題を把握できた。 ・人権LHRを通じて人権の問題について各種教材を用い考える機会を定期的に持つことができた。また、生徒同士が自分の考えを伝えあい聞き合う機会をもうけることができた。	B	・新1年生が回答した人権教育アンケートの結果を人権教育活動に反映させられていない。 ・職員研修会と前期人権LHRとのテーマを明確に絞って関連付けることができなかった。	・該当学年の傾向性や課題を該当学年と連携を図りつつ、次年度の人権教育計画に反映させる。 ・4月の人権教育推進委員会で職員研修会と人権LHRの目標について検討し教育活動に反映させる。
	・図書委員が中心となり、自主的に図書の管理や図書室の整備を行えるよう助言する。 ・図書室の広報や所蔵する書籍の紹介を行い、積極的に図書室が活用されるよう取り組む。 ・図書委員を中心に読書会を実施し、作品への分析を深め感動を共有することで読書活動の幅を広げる。 ・掲示板に新聞記事を掲示するなどして現代の社会的な課題や身近な話題を提供する。	・図書委員を中心に書籍の点検・管理や図書室の整備に取り組ませることができた。 ・図書委員会を開き、「図書だより」の発行を通じて書籍の紹介や図書室の広報活動に取り組むよう指導することができた。 ・前期読書会を開催することができた。（後期はインフルエンザによる学年閉鎖などで延期中） ・入試や小論文の対策の一環として掲示板を利用して話題を提供することができた。	B	・書籍の環境整備、一貫した整理・分類が必要である。 ・図書委員会は委員長・副委員長が中心になってすすめられているが、テーマ設定は職員の助言が必要であり、自主的に運営するのはいまだ難しい。 ・学校での学習活動・体験活動において、図書室や書籍がどのように活用できるかという視点が求められている。	・古い所蔵書籍についても、図書コード分類記号（Cコード）に従って再分類し、書籍管理を進める。 ・図書委員会においてブックトークや読書会など書籍に触れる機会を増やし、読書活動に関心を持たせる指導を行う。 ・「図書だより」の作成においては、書籍の紹介だけではなく生徒自身が紙面構成を考えるなどなど自主的に考える場を増やす

	重点目標	成果	評価	課題	改善策等
教務	・生徒の学びを支える「授業改善の継続的実践」 授業は生徒の未来を形づくる最前線である。すべての授業が「わかる・できる・楽しい」となるよう、授業観察とフィードバック体制を再構築する。個別の指導案検討会、動画を活用した授業研究、学年・教科横断のオープン授業月間などを実施し、授業力の向上を学校全体で追求する。	6月および9月に公開授業週間を設定し、計画的に実施している。 公開授業見学シートをロイロノートで共有する体制を整備し、授業の取組を可視化するとともに、教職員間の学び合いを促進することができた。	B	全教員の参加を目標としているが、見学参加率は約3分の1にとどまっている。 業務との調整が難しく、学校全体での授業改善の取組をさらに浸透させる必要がある。	短時間見学の導入や学年単位での相互見学日を設定するなど、参加しやすい体制を整備していく。 また、授業動画の活用や校内研修評価への位置付けを行い、全教職員が継続的に授業改善に参画できる仕組みを構築していく。
	・全教職員の専門性を高める「体系的な校内研修の実施」 年に数回の形式的な研修に留まらず、月次でのテーマ別研修を導入し、若手からベテランまでが互いに学び合える環境を整備する。校内の実践事例をもとにしたリレー発表形式の研修も導入し、理論と実践の両輪での学びを推進する。	ロイロノート活用研修など、授業改善に直結する実践的な研修を実施している。 また、「百問繚乱」における採点業務を通して教職員間の協働体制を構築し、校内の連携強化を図ることができた。	B	実施回数が限定的であり、年間を通した体系的な研修計画の構築が課題である。 また、時期や校務の状況に応じた内容設定を行い、計画的・継続的に実施していく必要がある。	年度当初に年間研修計画を策定し、月次テーマを明確にした体系的な研修を実施していく。 また、短時間研修や実践発表の機会を設け、継続的かつ参加しやすい研修体制を整備していく。
	・教務部主導による「教育課程マネジメントの高度化」 学力の3要素を育むため、年間の教育課程を点検・見直し、教科・領域を超えた関連性ある学びの構築を推進する。教育課程表の見直しと各教科間の連携強化を通じて、「課題研究」や「総合的な探究の時間」との融合を図り、実社会で生きる資質・能力の育成をめざす。	次年度のカリキュラム編成について、教職員と協議を重ねながら、生徒を中心に据えた教育課程の検討を行うことができた。 次年度以降は、7時間目がなくなり、部活動や検定補習に向けた時間設定がしやすい環境になる。	B	選択科目の内容充実と再構築が課題である。 社会の変化や生徒の進路実態に対応した授業内容への改善を進めるとともに、実習や探究的活動を含めた実践的なカリキュラム編成が求められている。	選択科目の内容を点検し、進路ニーズや地域・社会の動向を踏まえた再編を行う。 また、「課題研究」や「総合的な探究の時間」との連携を強化し、実習・探究活動を体系的に位置付けた教育課程へと改善していく。
システム管理	・教育活動の質を高めるための「情報共有体制の強化」 全教職員が常に最新かつ的確な情報を共有し、足並みを揃えて教育活動に臨むことは、学校運営の根幹である。そのため、ICT ツールの活用によるリアルタイム共有体制の整備、通信「Agile Education」を用いた全教職員への情報共有を行い、「伝わらない」を根絶する。	職員向け通信「Agile Education」を発行し、教育活動や校務に関する最新情報を共有している。 これにより、「百問繚乱」や Teams 等の新たなソフトウェア導入において、全教職員が共通理解のもと対応する体制を整備している。	A	3学期以降、通信の継続的な発行が十分に行えていない状況がある。 情報共有の手段を多様化し、安定的かつ即時性のある発信体制を構築する必要がある。	通信「Agile Education」を定期発行するとともに、Teams や共有フォルダを活用した即時配信体制を整備していく。 あわせて、重要事項は複数媒体で発信し、情報の確実な周知と共有の徹底を図っていく。

	重点目標	成果	評価	課題	改善策等
生徒指導部	○いじめの積極的な認知と、未然防止、早期発見・早期対応における組織的対応の徹底 ・面談等を通じて生徒一人一人の内面理解を深めるとともに、「チーム姫商」として教職員間で情報共有や連携を密に行う。	・年3回実施のいじめアンケート、学級担任による面談、家庭連絡等において、いじめを認知することができた。 ・いじめ事案の報告、状況に応じて対応チームの召集を行い、迅速な対応、情報の共有を行うことができた。	A	・いじめ事案に関する把握、初期対応時の情報共有については迅速に行うことができたと評価できるが、経過報告、いじめの解消等については十分に行うことができなかった。 ・学校全体、学年内において、全員に周知徹底が図れなかった。	・いじめ事案については、進展があれば随時、ない場合においてもいじめの認知時においては定期的に情報共有する機会を設定する。 ・情報提供、対応策等の共有の手段として、全体には職員朝礼にて生徒指導部長から、学年内には朝の打ち合わせ・学年会議において学年主任から行うなど形式化する。
	○学校や生徒の実態に応じた学校行事の計画と実施 ・学校行事や HR 活動を通して個々の生徒が持っているよさや可能性を引き出し、さまざまな場面においてそのよさを発揮できる生徒の育成を目指す。 ・行事ごとの目的を重点化するとともに、行事間の関連や統合をはかるなど必要に応じて行事の精選、簡素化を行う。	・1学期にミュージカルシアターラーニングを実施。文化祭では文化的交流として本校卒業生であるプロジャズシンガーを招くなど、日常の学校生活では得ることのできない世界観を体感することができた。 ・7月実施の夏季スポーツ大会を今年度初めて空調設備のある外部施設で実施。生徒の安全に配慮しながら企画運営することができた。	A	・各行事において、ボリュームアップ化する視点ばかりだけでなく、スリムアップ化する視点も必要である。アンケート等を参考に次年度はブラッシュアップしていく必要がある。	・今年度から設定した文化祭実行委員会など、各行事に対して組織を構築しさらに積極的に機能させていく。 ・ここ数年で新たに行った行事について、次年度以降継続するかを含めて精選する。
	○安全に対する意識を高め、主体的に安全を守るための行動が取れる態度を養う。 ・自他の命を守るための能力を身に付けさせることを目的とした、講習会や授業、HR活動等を実施する。 ・通学路等の危険箇所を把握するとともに、登下校指導の実施、ヘルメット着用の促進や交通ルールの遵守を徹底させる。	・新入生に対しては入学式前の合格者説明会、入学後の自転車点検時や交通安全教室においてヘルメットの重要性や交通ルール遵守の啓発を促すことができた。 ・学期ごとの下校指導や期間を限定した登下校指導などを行うことで、その間は校門遅刻者数が減少するなど一定の成果は見られた。	B	・自転車通学生のヘルメット着用率の向上、接触事故件数の減少など、自他の命を守る上で解決しなければならない課題が多く残っている。	・関係外部機関と連携し、講習会などを積極的に実施していく。また、全校集会や学年集会、生徒会活動を通して規範意識の醸成に向けた取り組みを行う。
生徒支援部	・教育活動全体を通して心身の健康の保持・増進に必要な自律的能力を培い、生涯にわたって主体的に健康な生活を保持するための基礎を培う。	・個別に自らの健康に関心を持つ指導を行った。 ・保健室の機能を十分にいかしながら、保護者や学校医と連携を密にし、心身の健康問題の早期発見や早期治療、疾病の予防に努めた。 ・健康教育講演会を実施した。	B	・健康診断結果を受けて、生徒自らが健康意識を持ち、健康の保持増進につながる行動がとれない生徒がある。 ・集団での健康診断時のプライバシー保護の徹底が困難。可能な範囲で最大限配慮し実施している。 ・生徒が病院受診する時間の確保が難しい。 ・がん教育の準備が遅れている。	・健康診断後の事後指導を個別に丁寧に進める。 ・健康教室を増やし、生徒が健康に関心を持つ機会を増やす。 ・学校として生徒の日常生活の中に病院を受診し定期健診や検査、治療を受けるための日を確保する。 ・がん教育研修会等に参加し実施できるよう準備する。
	・保護者や地域社会との連携を図りながら多様性の社会の中で、生徒にその一員としての共生の心を育成し、生命の大切さを体得する。	・保護者・専門機関と連携し個別に支援を必要とする生徒への支援を組織的に行った。	B	・支援が必要な生徒の把握と情報共有を円滑に実施する必要がある。 ・支援が必要な生徒の中学校からの情報提供がない場合があり、対応に遅れが出る場合がある。	・年度初めに支援が必要な生徒の把握、ファイルの作成更新、情報の共有までのスケジュールを作成し確認する。情報が更新されるごとに共有を行えるよう体制を整える。 ・可能な限り入学時に把握する。入学後把握した場合は必要に応じ保護者・中学校・関係機関と連携し生徒が学校生活で困難な状況にならないよう努める。 ・キャンパスカウンセリングをさらに生徒に開かれた機会にする。 ・特別支援校内委員会を時間割に組み込みメンバーが全員出席できるようにする。

	重点目標	成果	評価	課題	重点目標
キャリアセンター	<p>○キャリア教育を充実させ、望ましい勤労観・職業観を身に付けた生徒を育成する。</p> <p>・進路ガイダンス・職業人講話・インターンシップ・企業見学・卒業生を囲む会等の進路行事を通して、社会や自己に対する理解を深め、生徒が主体的に進路選択・決定できるようキャリア教育の充実に努める。</p>	<p>・進路ガイダンスや職業人講話、インターンシップ、企業見学などの各種キャリア教育を計画的に実施した結果、生徒は社会や職業への理解を深め、勤労観・職業観を育むことができた。</p> <p>・3年生の受験体験や卒業生の話を通して、具体的な進路情報を得ることができた。</p>	A	<p>・キャリア教育行事の振り返りが不十分で、学びが経験知として定着せず次の進路選択や行動に活かせていない生徒がいることが課題である。</p>	<p>・学びが継続的に蓄積されるよう、振り返り内容を学年進行後も継続して記入できるキャリアパスポートを作成し、経験を次の行動へつなげられる仕組みを整える。</p>
	<p>○生徒一人一人の能力・適性を把握した適切な支援により、進路目標の実現を図る。</p> <p>・定期的に生徒個々の進路相談を行い、生徒一人一人の進路実現に向けて必要な情報提供や支援を行う。</p> <p>・各試験対策として進学・就職・公務員の特別講座を実施する。</p> <p>・全職員による面接指導・小論文指導を行う。</p> <p>・学年・他部署と連携し、計画的なキャリア教育の推進を図る。</p>	<p>・3年生を対象とした進学・就職・公務員を対象とした特別講座を実施した。</p> <p>・3年生を対象とした全職員による面接指導・小論文指導を行った。</p> <p>・2年生の3学期に個別の進路相談を行い、進路目標の明確化と主体的な進路選択を促すことができた。</p> <p>・毎週、各学年の進路担当教員とキャリア委員会を開催し、キャリア教育の計画的な推進を図り、支援体制を構築できた。</p>	A	<p>・個別進路相談を2年生の3学期に実施しているが、早期からの計画的な学習・準備につなげるため、2学期からの実施を希望する声もあるが、3年生の進路対応に時期と重なるためどのように進めるかが課題である。</p> <p>・進路相談の内容を、学年や教科とより効果的に共有できる仕組みが十分に整っておらず、支援の一貫性を高める工夫が必要である。</p>	<p>・2年生の個別進路相談については、3年生の進路対応と時期が重なる負担を考慮しつつ、業務分担の見直しや日程調整を行うことで、2学期からの実施を可能にする体制を検討する。</p> <p>・進路相談の内容を学年や教科とより共有しやすくするために、記録の形式や共有の方法をわかりやすく整え、生徒への支援がよりつながりやすくなる仕組みづくりを進めていく。</p>
	<p>○学習活動・進路行事・キャリア系科目等における探究的活動を通して、主体的に社会や自己の課題を発見し、解決する力や新しい価値基準を創造する能力を育成し、未来のビジネスリーダーを育む。</p> <p>・「総合的な探究の時間」・「課題研究」等探究活動と連携し充実を図る。</p> <p>・ボランティア活動等の地域連携や協働活動の充実を図る。</p>	<p>・3年生は今年度より課題研究で企業と連携したPBL(課題解決型学習)を行っている。PBLでの学びを通して主体性や協働性を高めることができ、その成果を大学等の進路実現へとつなげることができた。</p> <p>・全学年において「総合的な探究の時間」を通して多面的に考える力や創造力が育成され、主体的に進路を考えるキャリア形成力の向上につながった。</p> <p>・子ども食堂などの地域ボランティア活動により、社会理解や協働力が高まった。</p>	B	<p>・「総合的な探究の時間」とキャリア教育のつながりが十分に整理されておらず、探究で得た学びを進路選択や将来のイメージづくりにより効果的に生かすための工夫が求められる。</p>	<p>・探究の振り返りを進路目標と結びつけて記録する仕組みを整えることで、生徒が学びを将来のイメージづくりに生かせるよう支援する。</p>

	重点目標	成果	評価	課題	改善策等
商業科	<p>・ビジネスリーダーとして社会に通じる知識・技術・態度を身につけさせる</p> <p>商業に関する基礎的な知識や技術を確実に身につけ、高度な資格にチャレンジする意欲を養う。また、あいさつや時間管理、マナー等の指導を行い、ビジネス社会で通用する態度を身につけさせる。</p>	<p>・全商検定三種目以上の取得者が63回生で97人、64回生ではITパスポートを9人が取得、情報セキュリティマネジメントを1人、基本情報技術者試験1人といった高度資格の取得が増加し、生徒の主体的な学習意欲と専門的能力の向上が見られた。</p> <p>・販売実習やPBL活動では、地域住民や企業関係者と関わる機会が増え、あいさつ・マナー・言葉遣いを意識した行動が自然と求められる環境が整った。</p>	B	<p>・検定や資格取得に向けた取り組みについては、商業科としての組織的な指導体制が構築しきれていない。</p> <p>・あいさつ指導は個々の教員に依存する場面が多く、学科全体としての統一したルールや指導サイクルが徹底されていない。</p> <p>・接遇マナーについて体系的に扱う機会が少なく、販売実習など実践の場に任せてしまっている面がある。</p>	<p>・検定・資格取得については、学科全体で年間計画を共有し、学年ごとに段階的な目標設定を行う。受験希望者へのサポート体制や補習の時間割調整など、商業科として一貫した支援を強化する。</p> <p>・あいさつ指導については、学科内で統一した基本ルールを設定し、朝のSHRや授業開始時など、全教員が同じ基準で指導できる仕組みをつくる。</p> <p>・接遇マナーについては、商業科独自の「マナー週間」や、外部講師による講演など、体系的に学習できる機会を計画的に導入する。販売実習やPBLと連動させることで、学んだマナーを実践で活かす経験につなげる。</p>
	<p>・多くの人と関わり、ビジネスの学びを実践・体験できる場の提供</p> <p>地域での販売実習や企業・大学と連携した実践活動を通して、同世代だけでなく、世代を超えた人々と協働しながら、生きたビジネスに触れる機会を多く提供する。</p>	<p>・販売実習やPBL活動をはじめとした外部との連携を強化し、生徒が学校外へ出て多様な人々と接する機会が大幅に増加した。これにより、生徒は教員以外の大人と関わりながら、商業活動の流れや現場で求められる態度、コミュニケーションの重要性を実体験として学ぶことができた。</p>	A	<p>・外部連携活動が増えるにつれ、企画・調整・引率などの教員負担が大きくなっており、学科内での役割分担や実施体制の整備が十分ではないという問題が顕在化した。</p> <p>・活動後の振り返りや成果の共有が個々の活動で完結してしまい、学科全体として学びを蓄積する仕組みが不十分であった。</p>	<p>・外部実践活動における担当者や役割を明確化し、学年横断のチームを編成することで、教員間の負担を平準化する。活動の年間計画を事前に共有し、準備や調整に係る業務を分散させる体制を構築する。</p> <p>・すべての実践活動について、生徒・教員双方が参加する振り返りの場を設け、成果・課題・改善点を整理する。振り返り記録を学科で共有し、活動の質を継続的に高める仕組みを整える。</p> <p>・一度きりのイベントで終わらず、継続的に発展させていくことで、生徒の学びを積み上げられる環境をつくる。</p>
	<p>・ビジネスの学びを通して、生徒が自ら考え、自ら行動できる主体性を育成する</p> <p>総合的な探究の時間や課題研究でのPBL(課題解決型学習)を通して、生徒が自ら課題や目標を設定し、自ら考え、行動できるよう教員がファシリテートすることで、社会に出ても柔軟に対応できる力を育む。</p>	<p>・多くの企業が協力してくださり、さまざまな業種でPBL活動を実施できた。</p> <p>・生徒のアイデアが実際に商品化されることや、パンフレット等に採用されるなど、学びが社会とつながる成功体験が生まれた。</p> <p>・実践的な課題に取り組むことで、自分の意見を持ち、行動に移す生徒や自らの進路の参考となった生徒が多数いた。</p>	B	<p>・生徒の主体性や活動の深まりに個人差が大きく、グループ内での温度差も生じやすい。</p> <p>・教員のファシリテート方法が各自に委ねられており、指導の質にはばらつきが見られる。</p> <p>・PBLのプロセスを支える共通の枠組みがなく、活動が属人的になりやすい。</p>	<p>・生徒が課題を見つけやすくなるよう、テーマ設定の流れ・具体例・参考ワークシートなど共有できるものがあれば整備する。</p> <p>・教員同士でも授業の進め方やワークシートなどの情報を共有し、教員も学ぶことができる環境を整える。</p> <p>・成果物や活動記録を学科で蓄積し、次年度への改善に活かすPDCAサイクルを確立する。</p>

	重点目標	成果	評価	課題	改善策等
情報科学科	高等学校DX加速化推進事業(DXハイスクール)の実施に向けて アイデアの創出から設計・製造までの一連の物づくりの過程を3Dプリンターを使って体験させる。3DCADソフトウェアを学習し、設計や製造のプロセスを理解させる。	・1人1台の3Dプリンターを導入することができた。 ・3D CAD ソフトウェアで設計したデータを3Dプリンターで出力し、設計の妥当性を即座に確認できる学習環境を実現した。 ・生徒一人ひとりの創造力を引き出すための環境が整備された。	A	・空間把握能力には個人差があり、その違いが作品の仕上がりにも反映されてしまう。差が目立つ場面が少しあったように見受けられる。	・空間把握の個人差を少しでも補えるよう、AI を活用し、生徒が自分のペースで設計を理解・改善できる体制を構築したい。
	基本情報技術者試験などの情報に関する国家資格の取得を推進	・ITパスポートをきっかけとして情報の国家資格について興味を持つ生徒が増えている。	B	・ITパスポートより上の国家資格に挑戦する生徒が少なくなっている。	・授業や部活動はもちろん、意欲的に取り組む考えを持つ生徒に対しての働きかけを強化する。
	先端IT人材として活躍するための情報活用能力の向上を目標とするために、データサイエンスの力を付けさせる。	ハイパーマーケットでアンケートをデータサイエンスの知見を用いて分析することで実践的な取り組みを行った。	B	・データサイエンスの学習時間が十分に確保できなかったため、深い理解が得られなかったように思われる。	大学と連携してデータサイエンスの力を育めるような体制の構築を目指す。
1学年	生徒指導面において、ビジネス社会で通用するマナーとTPOを踏まえた、5分前行動・適切な服装、頭髪・言葉遣いを身に付けさせる。	1学期では時間を守る・服装・頭髪・言葉遣い・携帯電話の使用方法は守れていた。	B	2学期になってから服装や携帯電話に対するルールやマナーが少しずつ守れない生徒が増えてきた。	今後も継続して、一人で抱え込まず、学年だけではなく専門部の先生方とも連携した指導を徹底する。また、時間を守る・服装・頭髪・言葉遣い・携帯電話の使用方法について、「当たり前」の事を「当たり前」にすることを、生徒との対話を大切にした上で指導する。
	教科指導面において、授業での課題提出のメ切的順守、資格取得数の向上を図る。	各検定試験の合格率 ビジネス計算実務検定試験 50.1% 簿記実務検定試験 88.4% ビジネス文書実務検定試験 39.9% 英語検定試験 56.0% 情報処理検定試験 80.5% 商業経済検定試験 74.2%	B	授業内容を理解しているかを課題提出で確認していたが、提出物を出さない生徒が固定化してきた。	課題を提出させる声掛けをするとともに、授業だけでは理解できなかった部分を放課後の補習を通じた学習支援をする。また、検定の前の補習については個々の担当者の負担を軽減させるために、全学年で「講座制」の補習を実施することを提案する。
	キャリア教育面において、部活動に原則加入させるとともに、防災・ボランティア活動、国際交流等に積極的に参加させる。	部活動加入率:94.1%(225名/239名 兼部生徒も含んだ延べ人数で集計) 令和6年能登半島地震被災地支援参加者:16名 国際交流(マレーシア)参加者:4名 国際交流(エジプト)オンライン参加者:4名	A	部活動加入率については、本校に入学した当初は入部していたが、人間関係のもつれや自分が思っていた活動内容ではなかった等の理由により、退部する生徒が増えた。	生徒会主催での部活動紹介で、できるだけ詳細な説明、部活動顧問だけではなく担任との生徒支援を今後も継続することが大切である。

	重点目標	成果	評価	課題	改善策等
2 学 年	学習指導や学力の向上を目指して基礎・基本の定着を図り、主体的に学ぶ姿勢を育成する。	授業に集中して取り組み、検定取得に向けて朝学習に時間を有効活用する姿勢が見られた。	B	確実に検定を取得するまで学習を進めるなど、粘り強く取り組む姿勢を伸ばしていきたい。	授業中に取り組む姿勢の改善に向けて全教科で指導していくことはもちろん、朝学習の時間を活用して基礎・基本の見直しや検定取得に向けた取り組みを強化する。進路実現と絡めて検定取得の意義を高める。
	進路指導・キャリア教育の充実 進路に対する意識を高め、自己理解を深めた主体的な進路選択を支援する。家庭との連携を密にし、生徒理解と指導の充実を図る。	キャリア行事を通して自己の進路を見つめ、実現に向けた取り組みのイメージを深めることができた。 生徒の意向に応じて科目選択を行うなど、家庭と連携した取り組みができた。	B	面談を通して自己に応じた進路選択を促すとともに、挑戦する気持ちを育む指導が必要である。	希望進路が大きく変わる生徒に対して情報共有が遅くならないように体制を整える。キャリアセンターとも連携して生徒情報を共有する。
	基本的な生活習慣と社会性を身に付けさせ、安心・安全な学年集団を育成する。また、修学旅行などの行事を通して互いを尊重し、協力し合える関係性を構築する。	生活習慣を整え、学年として一体感を持って学校生活を送ることができた。 修学旅行では集団の中での自己の役割を果たし、様々な出来事にも柔軟に対応するなど協力する姿勢が深まった。	B	学校の方針に対する理解を深め、規律を重んじる価値観の形成と学習に対する意識の向上が必要である。	授業や行事などの学校生活を通して自己の所属意識を高める。その所属内で求められる規律や作法などを身に付けさせ、母校に帆ころを持つ姿勢を育てる。
3 学 年	主体的な進路選択が出来るよう指導・助言すると共に、家庭との連携を密にする。	キャリアセンターの指導を中心に、早い段階から小論文対策や面接練習等を実施し生徒の進路意識を高め、志望通りの学校に合格することができた。	A	受動的な態度で取り組む生徒への高い意識付けを必要とした。また、話を人前でする訓練が必要と感じた。	入学時より社会問題に目を向けさせ、自分の意見を持つ習慣を身に付けさせ、人前で発表する必要がある。
	自ら学び、自ら考える力を育成すると共に、基礎学力の定着を図り、多くの資格取得をめざす。	進路実現に向け、一つでも多くの資格を取得しようと努力する生徒が増加したと同時に、多くの生徒が日商2級などの受験に必要な検定に合格した。	A	1年生から資格取得の重要性を指導するが、生徒になかなか定着しない。	全職員がさまざまな場面で専門高校生として資格取得の重要性を指導する必要がある。そして、受験に必要な検定を明確にし力を注ぐ必要がある
	集団の規律を重んじ、社会性、協調性を身につけると共に、コミュニケーションを大切に、信頼関係を構築する。	様々な学校生活の中で、お互いの個性を認め合う生徒が増えた。	B	集団になじめない生徒、なじもうとしない生徒が増えている。	学校行事や体験活動を増やし、相互理解力とコミュニケーション力を高めていく必要がある。